

■ 活動記録 ■

◆ 活動報告 ◆

市民との共同実践／一般公開行事

## 写真展「雲南の現在」について

佐 藤 哲 彦

(関西学院大学社会学部教授)

中国国境域／雲南班は2012年4月16日月曜日より20日金曜日まで、関西学院大学図書館エントランスホールにおいて写真展「雲南の現在」を開催した。この原稿では、写真展の狙いと工程、さらにその結果について報告し、今後の活動の参考にするために記録しておくことにしたい。

### 1. 写真展の狙い

そこでまずは写真展の狙いから述べておくことにする。以下の文章は写真展の開催にさいして配布した文書に掲載したものであり、この企画の当初の狙いをあらわしたものである。

#### 写真展「雲南の現在」によせて

本写真展は、関西学院大学先端社会研究所がこれまで行ってきた、中国雲南省における社会調査の意義の広報と成果の中間報告を兼ねたものとして企画された。雲南省における社会調査は、これまでのところ予備的な調査が一段落し、これから数年をかけて本格的な調査に入ることになっている。今後の本調査では、民族間の交流と混交、開発・経済発展とそれに伴う消費社会化と慣習の変容、などの調査研究が予定されている。いずれも、すでにいわゆる先進国では見えにくくなっている現代社会の枠組みを再考するための調査研究と位置づけられるものである。

したがって、ここで展示されている写真の文脈や背景についての解説は、社会科学的観点から行うことが可能であるし、また実際にそのようにして、幾つかの解説文は掲示されている。

すなわち、雲南省はこれまで中国でも最も経済発展が遅れていた地域であったが、東南アジア諸国の開放政策を背景に1990年代よりメコン河流域や鉱山などを中心として、開発が著しく進んでいること。東南アジア諸国との貿易により、その中心である昆明市は大きく発展するとともに、交通網の発達により省内の民族間の文化混交などが進んできたこと。開発と発展の影響で商品経済が普及し、昔からの生活習慣が変容しつつあり、奇妙な形で古くから習慣と新しい習慣が混じり合っ

ていること——いずれの写真も、これらのことを示すものとして理解することができるように解説を配置し、そう理解することを求めている。

しかしながら、実は写真というものは、その性質上、そもそもからそのような理解を前提とするものではないし、そのような理解そのものでもない。すなわち、そのように理解できるよう配置を行い、また全体をレイアウトしている。にもかかわらず、それが写真である限り、それが理解とは別の次元を開いてしまう。これは、写真が説明ではなく、認識だからである。

これを明確に指摘したのはスーザン・ソントグという批評家である。彼女は『写真論 (On Photography)』(晶文社、近藤耕人訳)のなかで、理解というものが対象の機能(はたらき)にもとづくものであり、その意味で対象が時間的な配置に置かれたことにより生じうるものであると指摘している。

あることがどう見えるかに基づいている恋愛関係とは対照的に、理解はそれがどう機能するかに基づいている。そして機能は時間の中でおこなわれ、時間の中で説明されなければならない。物語るものだけが私たちの理解を可能にしてくれるのである。(同書、31 ページ)

社会学的観点による説明の典型的な、あるいは伝統的な例は、対象をそれが果たす機能によって説明する作業であり、それは機能主義と呼ばれるものである。これは時間を前提とした歴史主義的な因果説明とは対立的にあるかのように論じられることも多いが、しかしそうではあっても、歴史とされる現象に比べると相対的に射程の短い時間を、その説明の中に繰り込みながら対象を捉える言語活動である。何かを語るということそのこと自体が、時間的経過をその活動それ自体の中に含んでいるからである。別の観点から言えば、理解に向くのはビデオなどの時間的経過がその性質上組み込まれた映像の方である。多くの場合、そこでは撮影された対象が、他の対象とどのように関係しているのか、他の対象にどのように影響を及ぼしているのかということについて、映像の時間的進行とともに明らかにされるからであるし、あるいはわれわれがそのように鑑賞してしまうからでもある。その意味でビデオ映像は社会学的説明と相性が良い。それとは対照的に、写真に(ほとんど)時間はない。そこにあるのは、コンマ数秒から長くても数秒の断片である。したがって写真は、理解ではなく認識するものとしてある。

ヒューマニストの用語では、写真の最高の使命は人間を人間に説明することである。しかし写真は説明はしない。写真は認識するのである。ロバート・フランク(注:現代写真家の巨匠)が、「現代の信頼すべき資料を用意しようとするなら、視覚的衝動は説明を無効にするようなものでなければならない」と言明したときは、まことに本心から出たことばであったのだ。(同書、117 ページ)

本写真展は、これまでの調査研究の意義の理解を求め、また中間的な成果の理解を求める目的のもと、個々に配置され、全体にレイアウトされている。それが目的であるのは確かである。しかしながら同時に、展示されているのが写真である限り、それは写真そのものとして鑑賞されうるし、また実際にそのように鑑賞されることをも期待している。そのように、理解と認識の二重化した（小さな）体験をしてもらうことが、この写真展の目的である。そのような二重化した体験こそが写真だからである。

社会学もしくは社会科学における写真の用い方になじみにある向きには、このような説明は、あるいは奇妙に思えるかもしれない。というのも、社会学もしくは社会科学における写真とは、記号論的に読解可能なものであることが自明であり、また前提だからである。しかしながらその場合、私たちは写真の中にある記号的な意味を見ているのであって、言ってみれば、写真そのものを見ているわけではない。ここでいう写真そのものとは、記号的要素とそれら記号的要素に回収されないものも含んだ図像のありようのことである。もちろんここではその是非が問題となるわけではなく、実際に、写真のなかでもドキュメンタリー写真やコンサード・フォトと呼ばれるものは、特定のメッセージ（意味）を伝えるために使用され、展示される。しかし、写真とはそのように限定されたものではない。写真は必ずしもある特定の目的に対して機能的に振る舞うものでもないし、そのような機会はあくまで写真の用い方の一つに過ぎないといえる。

とはいっても、逆に、芸術としての写真という観点を持ち出して、記号論的な写真の読解に応じることが、この場合あまり賢明ではない。それには、アラン・セクーラやロザリンド・クラウスらのいわゆるポストモダン写真批評による、そういった単一的な写真観への批判がすでにあるからでもあるし、また同時に、今回の展示内容からしてそのような観点はふさわしくないからでもある。

つまり、今回のように教育機関で写真を展示する機会は、とくに従来のような写真の記号的な読解を前提としない場合には、どのように写真を展示すれば良いのかということそれ自体について考える機会であること——これを踏まえた展示が、今回の企画の趣旨であった。

そこで、そのような機会である今回の展示は、まず第一に、何よりも鑑賞者が写真と向き合うということ、そしてその体験が、写真の記号的意味を読解することとは別に、それが自分自身を触発する何かだと感じること、あるいは少なくともその可能性を表示すること、これらを目的として上記のような文書を配布しつつ展示を行った。その意味で、今回の展示では、これまでの研究成果の中間的な成果の還元であると同時に、展示自体を一種の実験的なものと位置づけることにした。

## 2. 工程などについて

では次に、具体的にどのような展示を行ったのかについて、展示した写真の様式、および展示工程などを含めて述べておきたい。

## 2-1. 展示した写真と説明の様式

実際の展示に使用した写真は、主題となる全紙カラー 18 枚（中判フィルムカメラで撮影したセミ判カラーネガ 120 フィルムより手焼き外注プリント）と、解説用六切カラー 20 枚（マイクロフォーサーズシステム・デジタルカメラで撮影したカラーデータよりインクジェットプリンターによる自家出力）である。全紙 18 枚については全紙用ノートリミング仕様になっているマットパネル（黒）で展示を行い、六切 20 枚については通称「貼りパネ」と呼ばれる粘着式発泡スチロール製パネル（白）で展示を行った。そのほかの展示物として、説明用の A3 サイズの印刷物が 8 枚あり、これも同様の A3 サイズ「貼りパネ」（白）を用いて展示した。

なお、カラーネガフィルムを使用したのは、夏季であるために調査時における明暗差が大きいと予測され、したがってラチチュードを広くとりたかったためと、発色の特徴がリバーサルフィルムよりも望ましいと思われたからである。使用したフィルムはコダック製のポトラである。そこでプリントもコダック式のものを外注した。一方、デジタルカメラはメモ用に使用し、調査におけるより説明的な要素の撮影に使用した。

また、プリントについてだが、主題となる全紙カラー 18 枚については、ポトラ系の多少パステルがかった色調を出すよう調整するとともに、トリミングはなしで発注した。一方、六切印刷 20 枚も、本来であれば全紙プリントと色調を合わせて調整して出力する必要があるが、上記の「狙い」をもとにすると、写真として展示するものと、説明として展示するものの差異があることはむしろ望ましいとも考えられ、これらに関しては多少ビビッドに色調を調整して出力した。

## 2-2. 展示工程について

展示期間は 4 月 16 日月曜日から 4 月 20 日金曜日までの 5 日間であった。会場設営は 16 日の午前中に行い、お昼から展示開始という段取りであったが、先端社会研究所の事務手続きに問題があり、作業過程が増え、開始時間が多少ずれ込むことになった。当日になって、展示用パネルの予約がなされておらず、パネルがすでに保健館の健康診断に貸し出されていたことが判明したからである。そこで、施設課に急遽パネルを探してもらい、高等部が保管しているパネルを使用させてもらえることになった。結果的には、アルバイトとして雇用していた関学文化総部写真部の学生たちの手伝いもあり、また関学で展示物の作成・展示などを手がけている業者のアドバイスなどもあり、リヤカーで展示用パネルを図書館に運び、遅れながらも準備をすることができたのは運が良かったといえよう。ここでの教訓は、何か問題が生じたら施設課に相談するということである。

展示上の工夫についても加えておきたい。従来、学内保存の展示用パネルを用いて展示を行う場合、展示用パネルのボードをそのままにしてその上に展示を行うというのが多かったようである。しかしながら、写真などを展示する場合、パネル上の汚れやキズなどが目立つために、展示物に視覚を集中させることが難しい。鑑賞という集中力を要請する行為に対して、そのまま展示用パネルを用いることは不適切である。

## 写真展「雲南の現在」について

そこで、関学文化総部写真部の保管する暗幕（黒）を借りて、これで展示用パネルを覆い、そこに写真を展示するという形式をとることにした。そうすることで、鑑賞者は写真に集中することができるからである。また同時に、写真の展示用吊り具についても写真部から借り出し、吊り具の留め金については、学生会館の事務が保管しているもの（写真部が展示会の際に借り出すもの）を期間中借りることにした。

4月16日午前中の設営はしたがって、展示パネルの組み立て、暗幕の設置、写真パネルと説明パネルの設置という段階を踏んで行った。展示パネルのトラブルもあったため、設営にはアルバイト3名の学生（写真部部員）の手を借りても4時間ほどを要した。この時間で済んだのは、写真部部員の学生たちが展示の設営になれていたおかげでもある。

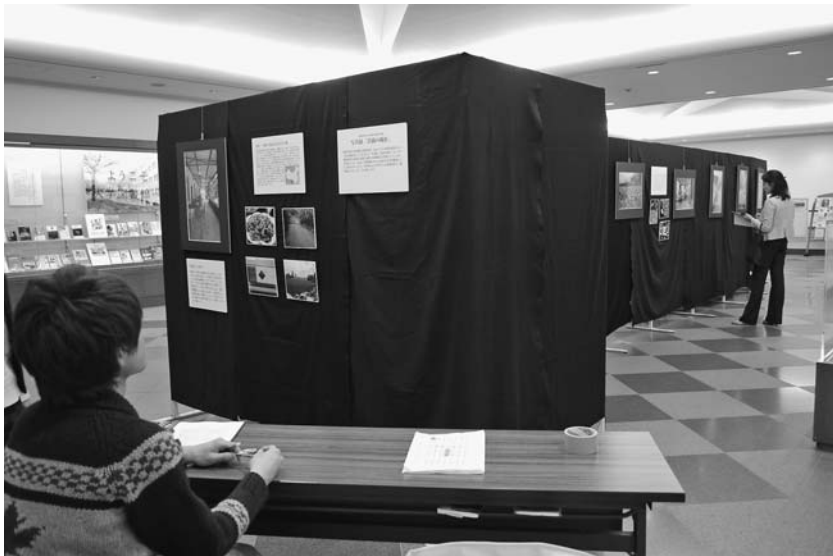




写真 1 展示の様子

### 3. 展示内容

ではここで、どのような写真を展示したのかについて、実際の展示に用いたパネル説明と展示した写真の映像とを画像で示しておく。以下では、パネル説明と写真映像（メインの全紙プリントとサブのデジタル出力）の代表例を展示とは多少異なるシークエンスで示しておく。「多少異なる」というのは、報告書においてはよりニアな記述しかできないものの、展示は面で行うためである。

#### 3-1. 展示内容（1）

<p style="text-align: center;">関西学院大学先端社会研究所主催 写真展「雲南の現在」</p> <p>関西学院大学先端社会研究所は、かねてより中国雲南省において社会調査を行ってきました。写真展「雲南の現在」は、その調査研究の意義の広報と成果の中間報告を目的としています。今回はとくに、2011年度調査のさいに収めた写真を解説とともに展示することで、学内外および学生たちに研究成果の一端を還元することが、その狙いです。</p>	<p>雲南——過去と現在が交差する土地</p> <p>中国の最西南部に位置する雲南省は、総面積 39.4 万 km<sup>2</sup>、日本とほぼ同じ大きさであるが、その面積の 9 割は山岳地帯である。また、国境である西部はミャンマー、南部と南東部はラオス、ベトナムと接し、中国全体で 55 を数える少数民族のうち 25 の少数民族が暮らす土地であるため、「少数民族の宝庫」とも呼ばれている。この地域は中国でも最も経済発展が遅れていた地域であったが、東南アジア諸国の開放政策を背景に、1990 年代よりメコン河流域や鉱山など、開発が著しく進んでいる。東南アジア諸国との貿易により、その中心である昆明市は大きく発展するとともに、交通網の発達により省内の民族間の文化混交なども進んできた。その影響で商品経済が普及し、昔からの生活習慣が変容しつつあるのが、雲南の現在の姿である。「雲南の現在」は、古くからの身振りと新しい習慣とが混じり合う、奇妙で興味深い光景を見せてくれる。</p> 
<p>街道沿いの食堂</p> <p>面積の 9 割が山岳地帯である雲南に行くのは、それほど容易ではない。中心地から各地に伸びている高速道路網はまだ工事中のところも多く、そもそも普通の道路が落石や陥没などに見舞われて、ときおり通行止めにもなる。田舎の道路沿いには食堂などがあり、材料を選んで調理してもらう。日本では口にしない、蜂も重要なタンパク源である（美味しい）。</p>	



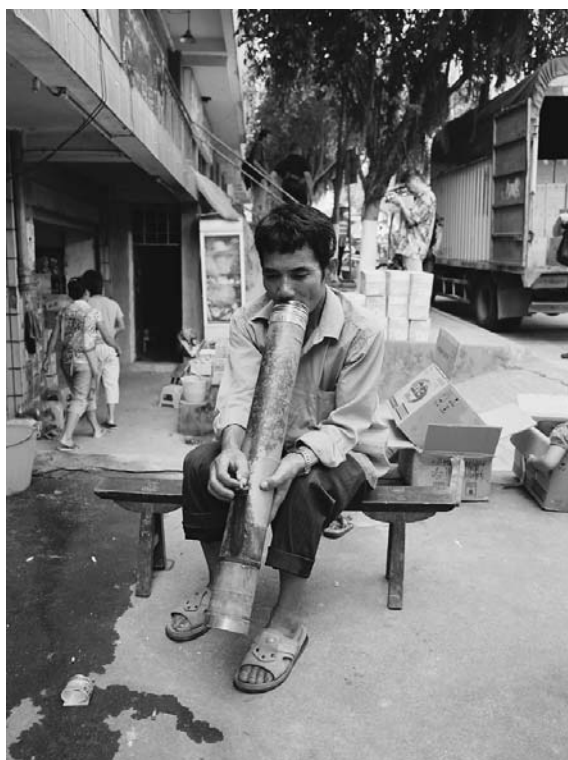


### 3-2. 展示内容 (2)

#### 嘎酒（ガサ）の朝

雲南省 新平彝族傣族自治县の西端にある嘎酒（ガサ）鎮までは、雲南省の省都である昆明市より、この地域の中心である玉溪市を経由して、車で半日ほど西に行く。経由地の玉溪市は中国の国内外でタバコのブランドとして有名である。そもそも雲南省はタバコの産地として知られており、省全体の生産量は世界第二位のブラジルに匹敵する。中国は全体では世界第一位であるが、そのなかでも雲南省の生産量は抜きんでている。農村部では米の生産のほかに、とくに山間地域でタバコの生産が目立つ。朝食は米を使ったミーシェン（米線）という麺が一般的だ。ミーシェンは日本ではビーフン（米粉／台湾語）として知られている。

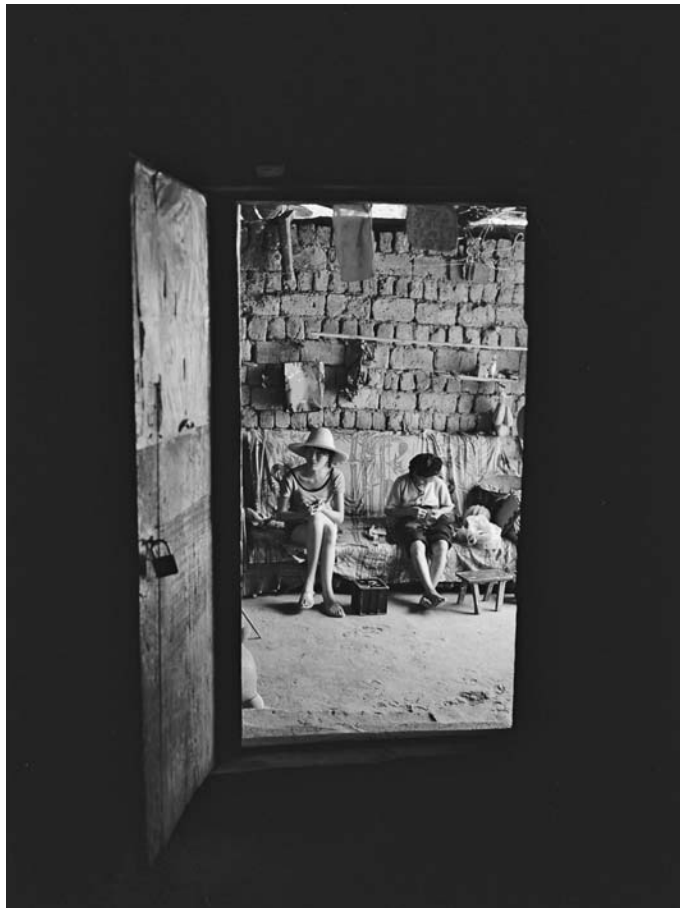






民族のしきたりと民族間の交流

雲南で気づかされるのは、高さの大きく異なる椅子があちこちで用いられていることである。とくに興味深いのは小さな低い椅子で、これは少数民族が使用しているものである。一方の漢民族は大きな西洋式の椅子を使用する。嘎洒（ガサ）鎮では、これらの椅子が食堂などで混じり合っていることが確認できる。嘎洒（ガサ）鎮周辺の平野部はタイ族が多い。タイ族の女性は外出時に民族服を着て黄色の笠をかぶる。年配の女性はたいてい入れ墨をしている。若い女性はしていない。昔は入れ墨を強制されたが、こんにちではそれはないという。



（なお、この作品は写真展の DM にも用いたものである）

### 3-3. 展示内容 (3)

#### 商品経済と古くからの習慣

嘎酒（ガサ）鎮近郊では、鉄を産出する鉱山と銅を産出する鉱山が川をはさんで向かい合っており、鉱山用の集合住宅が建ち並んでいる。以前は商人として遠く四川省まで出かけていたというタイ族の男性は、安定した収入のために商売をやめ、鉱山で働き始めたと話す。雲南省はメコン河流域や鉱山の開発などにより急速に発達し、商品経済が大きく浸透した。そのため、古くからの習慣が商品経済と奇妙な形で結びついている様子が観察できる。たとえば、地元で生産されたタバコの葉をそのまま用いるのではなく、タバコ会社で一度紙巻きに加工されたものを、昔ながらの水パイプで吸うという奇妙な習慣が生まれ、広く普及している。一方、少数民族の経済状態は漢族ほどには好転していないため、国連が少数民族向けに土産品制作などの貧困対策プログラムなども実施している。









### 3-4. 展示内容 (4)

#### タバコ生産

水はけの良い平らな土地では米作がおこなわれており、棚田などでも有名な雲南省であるが、水はけの悪い丘陵地ではタバコ生産がおこなわれている。タバコは大きな葉を取り入れ、それをいぶして乾燥させる。イ族のこの村の名産は、竹（による割り箸生産）とタケノコであるが、やはりタバコも大きな役割を果たしている。村の外側にあるタバコ畑で栽培されたタバコの葉を、大勢で集め、それを煙製小屋にもって行っていぶす。しかし、にもかかわらず彼らが愛飲するのは、タバコ会社が生産した紙巻きタバコである。



#### メコン河畔

メコン川はチベット高原に源流をもち、雲南省を通して、ミャンマーとラオスの国境、さらにタイとラオスの国境を流れ、最終的にカンボジアとベトナムを通り抜けて東シナ海へと通じている。メコン川沿いは東南アジア諸国の重点的な開発地域となっており、そのため雲南省は東南アジア各国との交易路となって発展してきた。その一方で、中国企業もメコン川沿いの東南アジア諸国に進出し、現在では徐々にその進出規模を拡大しつつある。中国企業は雲南の名産であるタバコやコーヒーなどの栽培を、すでに隣国ラオスの契約栽培農家などでおこなっている。



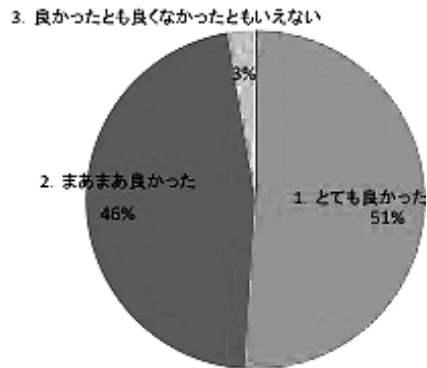
#### 4. 展示結果について

今回の写真展では、会場の受付に簡単なアンケートを置き、鑑賞している人たちに対して、時間があればそれに記入してもらうという作業も同時に行った。ただし、オープンな会場であるために鑑賞者全員がアンケートに記入したわけではなく、また受付の担当者（アルバイト学生）によってアンケートのお願いが上手く出来なかった様子も見られること、さらに昼休みなど鑑賞者が比較的多い時間帯にアンケートボード（クリップボード）が不足するなどしたために必ずしも全員にアンケートを渡せなかったことなどから、以下に記載するアンケート結果は参考程度のものである。参考程度のアンケートを行ったのは、今後同様の写真展を開催する場合に、企画上の参考資料にできると考えたからである。したがって、鑑賞者の属性や反応についてのごく簡単なアンケートとなっている。なお、回収したアンケート数は151である。

##### 4-1. 感想

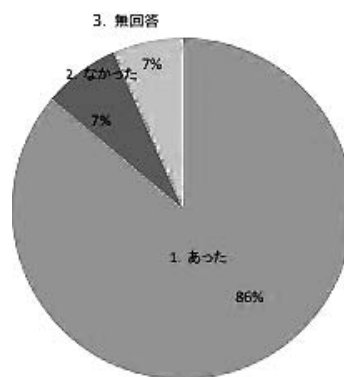
まず、写真展の感想として「Q1. ご覧になってのご感想をお聞かせください。」と質問し、回答を「1. とても良かった」から「5. まったく良くなかった」までのスケールとしたところ、以下のような結果となった。自由記述と合わせると、好意的な反応が多かったと考えられる。

## 写真展「雲南の現在」について



### 4-2. 気に入った作品

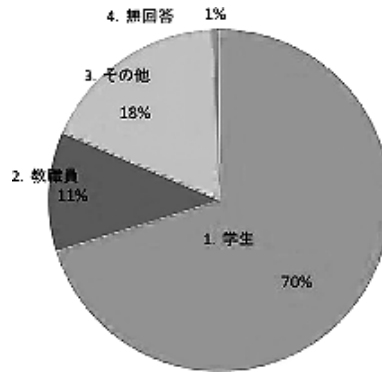
次に、上記の質問と関係すると考えられるが、気に入った作品の有無について聞いたところ、8割以上の鑑賞者が気に入った作品があったと答えている。



ここでは併せて、気に入った作品についても聞いており、好みの傾向は全般的に分散してはいるものの、子どもの写真と市場の写真が好評であったことがうかがえる。自由記述と合わせて考えると、説明的な写真よりもむしろ日常的な写真（に見えるもの）の方が、比較的好まれたようにも考えられる。

### 4-3. 鑑賞者の属性

また、鑑賞者の属性であるが、学内の図書館という会場の性質から、当然のことながら学生が多い。ただし、一割強が定年退職者や図書館の一般利用者、あるいは他大学生などによって占められている。グラフ中その他は18%となっているが、留学生や聴講学生を除くとおおよそのくらいの割合になる。



#### 4-4. 自由記述（感想など）

最後に自由記述の感想を挙げておきたい。上に見るように比較的好評であった写真展であるが、好評の理由の一つは、中国もしくは雲南省の様子について知ることが出来たということにあるようである。それに類する記述を挙げておくと、

1. ガザの民族の日常生活が写真を通してよく解る。どの写真もよく撮れていて奇麗です。
2. 私は海外に行ったことがないのですが、写真を見ているだけで旅行したような気分になりました。
3. 雲南省のことや伝統的なタバコ生産のことが知れて良かった。
4. 東南アジアを行ったことがなく、写真を見て一度は訪れてみたいと思いました。
5. 市民団体で雲南省出身の人を支援しているので、彼女の郷里を見たくて来ました。
6. 中国にもいろいろな側面があるものだなと思いました。
7. 私も中国人なのに、自分の国の少数民族に対して知っていることがかなり少ないです。この写真展を通して、今の少数民族の生活状況が少しでも分かるようになって来た。とてもよかったと思います。
8. 中国といえば現在高度経済成長中の国であり、きらびやかなイメージだったが、雲南等の地方はマスメディアに取り上げられない昔の貧しいイメージの中国だったので、現在の中国の「幅」の広さを知れて良かったです。

一方、今回は、説明的な写真（とくにサブのデジタル出力）以外では、できるだけ日常的な写真を用いるようにしたこともあり、そのような傾向性に対して好意的に捉えられていたことがうかがえる。とはいえ、単に日常写真というわけではなく、そこに雲南省の農村部ならではの——例えば消費文化の浸透など——があることが比較的理解されていたようにも思われる。

9. 昔ながらの空気感と妙に進んだ近代化の影響の交わりに違和感を覚えた。



10. 女の子が何かくわえてカメラ視線なのがかわいかった。「雲南の現在」というテーマの通り、現地の状況がすごくはっきり表現されていたと思う。
11. 農村で子供が買ったアイスクリームを食べている写真は消費社会の浸透のプロセスがうつし出されていておもしろい。また子供の服装も同様のことがいえる。
12. 世代によって服装が違う。どの国も若い女性は同じようだ。
13. その土地古来の文化と西洋文化が混ざっている様子をうかがうことができ、さらに雲南省に魅力を感じました。このように商品経済が浸透し、格差がさらに大きくなるのだなと感じました。

また、写真として鑑賞するという態度が少なからず見られたことも特徴的であるといえる。それに類する記述を挙げておくと、

14. 人々の生活と自然がちょうど良いかんじで写真の中におさまっていた。
15. 写真がとてもきれいで生活の様子がよく伝わってきた。被写体の人々の表情がとても豊かでよかった。
16. 異国の人のふとした表情が良いと思います。
17. 人を被写体にしてしている写真の人の目線に目力があってとてもひきつけられた。
18. とてもきれいな作品ばかりで感動しました。
19. 色にひかれてつい見てしまいました。

## 5. 今後の課題

アンケート結果で示されているように、比較的好評であった今回の写真展だが、その一方で幾つかの課題も浮き彫りになったと考えられる。もっともそれらは今回の写真展に限るというよりはむしろ、おそらくは写真展という研究成果還元の方法そのものに関するものとして考えられるであろうし、さらに言えば、写真を鑑賞すること、あるいは写真鑑賞を教育することそれ自体の難しさを示唆しているとも考えられる。

今後の課題の一つは、写真点数をもっと増やす必要があるということである。自由記述では二件ほど、もっと写真を増やして欲しいという記述が見られた。予算と会場の都合もあり、説明的な写真以外をこれ以上増やすのは難しいとも考えられるが、もし説明的な写真による成果還元を考える場合には、参考にすべき方向性であると考えられる。

二つ目は一つ目と関係することだが、写真を鑑賞する際にとる態度の多くが、説明的な理解を求めているということである。今回の写真展では、上記で引用した「狙い」を配布し、そのことで説明的要素と写真的要素のバランスをとる旨を伝えたものの、写真を写真として鑑賞するという作業

自体は一般的ではなく、したがって説明をさらに求めるような意見もいくつか見られた。このこと自体は今回の写真展の課題ではないが、しかしながら写真によって成果還元を目指す場合には、やはり参考にすべきものであると考えられるだろう。

最後に、上記二つの課題は、写真鑑賞の教育上の課題へと繋がっている。少々話が大きくなるが、まとめとしてこれについて触れておきたい。われわれの周りにはとくに広告を中心として写真があふれている。しかしながら、それらの多くは記号的読解を前提としたものであり、その作業がわれわれのほとんどの写真との関わりである。その中で、写真を写真として鑑賞する態度がおそらくは不足していることが、今回の展示の結果からうかがえる。そのような態度の涵養もまた、今後の写真展開催においては考える必要がある課題であろう。